

「希望に満ちあふれる教会」  
ローマの信徒への手紙 15 章 7-13 節

本日、横浜本牧教会は創立 140 周年の記念すべき日を迎えました。その始まりは、アメリカからの宣教師の命がけの献身と、主の愛に捉えられたわずか 12 人の信徒たちの篤い祈りでした。人間の目から見れば小さく頼りない灯火だったこの群れが、140 年という長い歴史を紡ぐことができたのは、決して人間の力によるものではありません。人間の熱意や知恵には必ず限界があり、時代の嵐の中で心折れる瞬間があります。この歩みを支え続けてくださったのは、「希望の源である神」ご自身にほかなりません。私たちはこの節目にあたり、歴史を導いてくださった神をもう一度見上げ、これからの歩みへと押し出されたいと願います。

教会を今日まで立ち続けさせてきた原動力は、先達たちの胸に燃え、世代を超えて受け継がれてきた「希望」です。聖書が語る希望は、状況のよし悪しに左右される世俗的な樂觀主義とは根本的に異なります。それは、主イエス・キリストの十字架と復活に根ざした、神の真実なる約束です。キリストの十字架は絶望の極みを示しますが、神は復活によって命の光を輝かせ、すべての闇に勝利されました。本牧教会もまた、関東大震災による倒壊、戦火、近年のコロナ禍など、数々の試練をくぐり抜けてきました。私たちが今もここにいられるのは、私たちの信仰が強かったからではなく、弱く小さく手を離しそうな私たちを、神がその御手で握り続けてくださったからです。

パウロは「希望の神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように」と語っています。人間は普通、希望があるから喜べると考えますが、聖書の順序は逆です。まずキリストの赦しと愛によって深い喜びと平和で満たされ、それが器から溢れ出るようにして希望が広がっていくのです。だからこそ私たちは、「キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」という御言葉に応じる必要があります。多様な背景を持つ人々が集まる教会において、キリストの十字架の前で互いの違いを豊かさとして喜び合い、弱さを補い合って受け入れ合う関係の中にこそ、神の平和が具体的な形となって現れ、世への希望の証しとなります。

神からいただいた希望は、教会の内側だけに閉じ込めるものではありません。現代の地域社会には、孤独や将来への不安、分断といった「絶望」が渦巻いています。今こそ教会は、この本牧の地に立ち続け、絶対に揺るぐことのない本物の希望を次の世代や社会へと分かち合う使命を担っています。私たちの前には、群れの減少や無力感といった現実的な課題もありますが、パウロは「聖霊の力によって」希望に満ちあふれなさいと励ましています。140 年前の先達も同様の不安を抱えながら、聖霊の力によって動かされました。私たちは己の弱さを主に差し出し、永遠に共にいてくださる希望の神に信頼し、聖霊の力に満たされて、新しく始まる 141 年目の最初の一步を力強く踏み出していきましょう。